

Day of a Dragon

「んあー……暇だあ……」

とある家の一室で大柄な人影がだらしなく寝っ転がっている。尤も、大柄と言ってもその巨体は並大抵の物ではなかった。

塊と呼べるほど膨れ上がった僧帽筋に、とても服が着れそうに無いほど肥大した三角筋。大きく三つに分けられる各部位がそれぞれ非常に発達しており、その境目に指を挟めそうなほど深い谷間を形作っている。巨大とも呼べるほどの三角筋であったが、その付け根から伸びる腕は更に太く、ある種の恐怖すら覚えるほどの迫力であった。上腕二頭筋、三頭筋共に脱力しているにも拘らず水がパンパンに膨らんだ風船のように張り詰めており、針で突けば破裂するのではないかと思うほどだ。但しこの筋肉風船は当然破裂することなどなく、寧ろ力を込めれば更に大きく膨れ上がる代物なのだが。

「んー……」

不意に神殿の石柱のような両腕が、巨体を持ち上げて大きく体勢を変える。それに合わせて、腰まで伸びた橙色の派手な長髪が滑らかな動きで乱れては、緩いウェーブの整った髪形へと戻った。触角のようなアホ毛と、両サイドから伸びる謎毛もちょっとした身体の動きに合わせてピコピコと動いている。ぼんやりとした顔のまま大あくびをすれば、鋭く発達した犬歯が顔を覗かせた。

惰眠を貪っていた桐生ココが漸く動き出したのは、夕方になろうかという時間であった。まだヒンヤリとした気候が続く時期であったが、「彼」の身体は幾分汗ばんでおり、むんむんとした匂いと空気を纏っていた。尤もそれは、これ程の筋肉を維持できる程の代謝であることの証明でもあると言えるだろう。

首の根元までせり上がった大胸筋は片方だけで座布団、いやそれ以上はあろうかという広さを誇っている。そして大胸筋同士がぶつかり合って出来た谷間は、500 mlのボトルであれば挟めるのではないかと思うほど深く、そして濃厚な雄の臭いを充満させていた。因みに広さもさることながら、彼の大胸筋は分厚さも凄まじい。横から見れば爆乳と呼べるほどせり出したそれは、彼が着れる衣服を著しく制限させるには十分過ぎる程であった。

「このタンクトップも伸びちゃってダメですねェ」

引き伸ばされてよれよれになった生地を摘まみながらそんな、言葉を零すココ。汗をふんだんに吸ってジットリしてしまった感触は不愉快そうに思える。脱ごうとして服を捲るが

……。

「んぐぐぐっ……脱げねェなこれ！鬱陶しー！」

ピタリと張り付いた布地と、ゴツ過ぎる肩回りと腕が邪魔になって苦戦しているようだ。タンクトップと言えばその脱ぎ着のし易さが売りの一つであるが、彼の規格外過ぎる肉体の前にはあまり意味を成していないようだ。

「面倒くせェなアー……じゃあ、こうだ！」

そう言ったかと思うと大きく息を吸って力を込め始めるココ。胸が大きく膨らむのと同時に、大胸筋そのものもパンプアップしているようだ。谷間から走る筋が太くなり、ギチギチと音が聞こえるほど大胸筋同士がぶつかり合っていく。肥大化する大胸筋の大きさに耐え切れなかったのか、タンクトップはサイドの縫い目から綺麗に裂けてしまった。脱ぐのが面倒だからとは言え、凄まじい筋肉量だから成せる技と言えるだろう。そうして上半身裸になったココが腰に両手を当てて軽く伸びをする。彼の巨体だと手を上に伸ばせばうっかり天井を突き破りかねないからだ。身長3m近くになる彼の身体に合わせて建てられた家とは言え、限度というものはある。

太く長い尻尾を暫し動かしてから、腰に引っかかっていたタンクトップを器用に耒り取って明後日の方向に投げ捨てる。そうなるに漸く彼の肉体の全貌が明らかになるのだ。大胸筋に隠れてはいるがしっかりと存在感を主張する腹筋。どれも常人の掌よりも大きいだろうか、厚みも相当なものでぼこぼこと連なる様は山脈のようでもある。体側に走る腹斜筋も発達しており、鱗の状のそれはまるで恐竜の鱗のように思えてくる程だ。腰回りは他の部位程の発達は見取れないが、外腹斜筋が形作る段差は谷のようで、インナーマッスルも見えないだけで凄まじい発達具合なのだと想像するのは容易だろう。

上半身ですら凄まじい筋肉量であるのだから、それを支える下半身も当然尋常ではない造りになっている。最も大きい筋肉と言われる大腿四頭筋など、本当に身体の一部であるのかという疑念を持つ程に巨大だ。内転筋もまた、左右で触れ合うのではと思うほど大きい。膝から下も非常に逞しく、図鑑に載る恐竜のそれを想起させる程ではないだろうか。

そして巨木のような両脚も目を引くが彼の場合は……股間に鎮座する巨大な塊だろう。男である以上当然ついてるものではあるが、その大きさは成人男性の比ではない。片方がバランスボール以上はあるだろうかという大きさの金玉、そしてその金玉の谷間にどっかりと横たわる極太の肉棒。肉棒は普段から酷使されてるのか赤黒く焼けており、目測でも長さ90 cm太さ40 cmはあるだろうか。

彼が住む町——バーチャル世界にある幌頼舞町には、彼と同様に異常に発達した肉体を持つ者が何人も住んでいる。ある者は現役の男子高校生、ある者は生意気な魔法使い、またある者は騎士に憧れる青年……種族を問わず強靱な肉体と不可思議な能力を持つ者たちをライバー、あるいはその身体になぞらえてゴリライバーと呼んでいる。

桐生ココもまたゴリライバーであり、本人は気にしていないがその力量で言えば最上位に君臨していると言っても過言ではない。何せ彼はドラゴンなのだ。幻想世界の住人であり、あらゆる生物の頂点に立つ存在。そんな、神をも恐れさせる種族の最後の生き残り……なんてことはなく、諸事情あってこの町で暮らしている只のドラゴンである。本人は神より強いと豪語しているが。

「涼しくなってきたし、そろそろヤリに行くかなア～」

部屋でゴロゴロしてたのも無駄な性欲を抑えるという目的があつてのことである。彼ほどともなると、室内で自慰をすれば大惨事になるのは目に見えている。故に、涼しくなつてから性欲を発散しに行くのが彼のここ最近の日課であつた。

スパッツのような物を引っ張り出して穿くココ。股間部分がポケット状になっており、そこに巨根と巨玉を収納する。

「んっ、キツくなってきてるけど……成長期だから仕方ないネ」

伸縮性抜群であるがゆえに穿けてはいるが、かなりパツパツに布地が引き伸ばされている。穿けなくなるのも時間の問題だろう。上も適当に1枚羽織って外へ出るココ。裸になることに抵抗はないが、裸の不審者だと思われるのはまた気の持ちようが違うようだ。

力を込めると、背中にニュッと小さな翼が生え、あっという間に大きくなり立派なドラゴンのそれが現れる。艶のある殻が夕陽を反射し、本人の暑苦しさと裏腹に綺麗な絵面に仕上がってるのは如何なものだろうか。

「じゃーちょっくら出かけるでエ！Let's fly！」

一度羽ばたくと周囲の草木が激しく揺れ、二度羽ばたけば竜巻のような暴風が周囲を薙ぎ払っていく。幸いなことに周りに住宅はないが、植生が吹き飛ばされないように加減しながら上昇し、ココは何処こともなく飛んでいくのであつた。

この幌頼舞町では、不思議な出来事や人物に遭遇することが多々あるという――。

郊外にある原生林を要する大社には狼の特徴を持った美少年がいるとか、機械関節の優し気な雰囲気ロボットがのんびり散歩しているとか、精悍さと可愛らしさを併せ持つ偉丈夫の褐色エルフがいるとか……。例を挙げていけば、枚挙に暇がない。尤も種族に違いはあっても、彼らには共通点がある。全員が男であり、人並外れた巨体と筋肉、そして巨大な逸物を持っているということだ。魔法など不思議な力を持つ者もいるらしい。

都市伝説のように語られる彼らだが、実際のところは写真や映像でその姿を捉えられている。ただ実際に目撃した、或いは接触した人間があまり口外しないが故に生きた伝説のような扱いになっているのだとか。

それは何故か。一つは、彼らという存在に魅力を感じてしまったがゆえに自分の心に仕舞い込もうとする……。一つは、彼らが引き起こす「行為」に巻き込まれてしまったが故にそれに憑りつかれた……。などなど原因は幾らでもあるのだろう。

とは言え、そんな彼らを敢えてこの目で見てやろうという人間は多い。若い世代を中心に、町中や郊外を駆け回ってゴリラライバーの姿を探す者も少なくはないようだ。それらに深い意味はなく、ただ達成感と周りへの自慢……。そしてある種の禁忌に触れることへの高揚感が彼らをそうさせるのだろうか。

話は変わるがこの町の郊外には、廃品置き場や廃ビルが点在している。役場などで調べてみれば公な記録はなく、しかし常に何ヵ所となく存在しているのだそうだ。足を運んだ次の日に訪れれば無くなっているという事も日常茶飯事らしく、この町における不思議の一つとして数えられているのだとか。

この廃工場もまた、そんなスポットの一つである。8階建てのビルと車の工場が隣接しており、敷地内には何十台もの車が打ち捨てられていた。車はどれも廃車とは思えないほど綺麗で、普通乗用車から大型のマッスルカー、軍用装甲車に果ては電車の車両まで揃っている。何とも不可解ではあるが、ここは「そういう場所」なのだ。

やがてバサッ、バサッという重々しい風切り音と共に、巨大な塊が降ってきて轟音と共に着地した。1t以上ある巨軀は小さなクレーターを作り出し、それを生み出した張本人は仁王立ちで周囲を見渡している。

「今日はソロの気分だったけど、うん、良い品揃え。これなら楽しめそうだな♥」

ココがこの廃工場を訪れたのはどうやら性欲の発散が目的であるようだ。何故こんな場所と、性欲の発散が繋がっているのか。それは今から繰り広げられる彼の痴態を見ればすぐ

に分かるだろう。

とは言ってもすぐに始める訳ではない。何事にも準備というか、そういったものが必要なのだ。ココはまず手近にあった鉄骨をヒョいと片手で持ち上げる。ビルの鋼材として用いられる規格であるため m/100 kg を優に超える重量の筈であるが、彼は割りばしでも摘まむかのような感覚で持ち上げ、軽く弄ぶまでしている。

そのまま両手で掴み直すと、徐に振じり始めた。金属同士が擦れ、引き裂かれる耳障りな音が十秒ほど続き、鉄骨が地面に放り捨てられる轟音が鳴り響く。フッと一息ついたココは汗ばんでおり、太めの血管が浮き上がるほどには興奮しているようだ。それと同時に、股間の巨大な膨らみもその大きさを増しているようだった。これが所謂ウォーミングアップのようなもので、全身の血流を活性化させて筋肉のポンプアップや逸物の過大なまでの勃起の下準備と言ったところだろうか。

「チンチンも窮屈だし開放してやらねェと……」

下着をズリ下ろすとブルンッ！と空を切る勢いで、長大な逸物はその全貌を覗かせる。人間のモノとは少々違う歪な形状、しかしそれは紛れもなく男性器のシルエットをしていた。だが竿のあちこちに、棘と見紛うばかりに凶悪な形状をした肉イボが幾つも乱立している。半ほどまでズル剥けになった陰茎には何重もの肉襞が連なっており、未だこの逸物が本領を見せていないことを誇示しているかのようだ。纏う臭いは強烈そのもので、これまでに文字通り無数の物を、そして相手を犯し楽しんできた貫禄を見せつけているかのようだ。

やや勃起状態の逸物をブルンブルンと揺らしながらココは次の獲物を探して回る。巨大な彼と見比べれば、普通車でもサイズ比が人間と自転車のように見えるものだから大したものである。

「お、これなんか良いじゃんね」

次に彼が目につけたのはバスのようなものだ。広大な敷地内に数台が綺麗に停められおり、まるでミニチュアを人の手で並べたかのような整然さであった。

停まっている 1 台のフロント部分を掴むと、そのまま台車を引くかのような気軽さで集団の中から引っ張り出す。フロント部分が凄まじい力で引っ張られてガラスが割れるが、そんなことは問題にはならない。何故ならこのバスもまた今からココによって破壊されるからだ。側面に回り込んだココが窓をノックして叩き割っていく。そして空白だらけになった枠を両手で掴むと、そのまま腕を曲げ始める。ギシギシという音と共にバスの車体が浮き上がり、ココはそのままバーベル上げの要領で上へ上へと持ち上げていく。自重でフレームが歪み、幾つかの窓ガラスが粉碎されてその破片がココにも襲い掛かるが、その身体に傷一つ

付けることなく弾かれては地面に散らばっていく。

「ふう` ううっ……っ。人間モードだとこれくらいでもっ、中々負荷があるんだよなア……！」

ココの額を汗が流れ、只でさえ肥大な筋肉が更に膨れ上がっている。バスの総重量は約10tにもなるので、自分の体重の14倍近い物を持ち上げていることになる。尤も彼が「本気」を出せば"出来ないことの方が少ない"ということもあり、制限が大きく掛かる人間モードは退屈凌ぎとしては打ってつけであったりするのだ。ココはバスを持ち上げたまま、スクワットを始める。太腿で密接し合う大きなパーツ達がお互いに擦れ合い、ギチギチと凄まじい音を立てる。大小さまざまな血管が大きく浮かび上がり、膨大な量の血流を目まぐるしく循環させているようだ。脚を上下させる度に全体の太さが増し、その太さたるや成人男性がしがみ付いても十分余りある程だろうか。胴回りの筋肉も大きく隆起し、普段から大きく浮き上がっている腹筋もその厚みと主張を倍増させている。

100回ほどスクワットをこなしたところで、大きく腕を伸ばしてバスを高く持ち上げる。凄まじい筋肉量誰ともなく見せつけ、全身に汗を滴らせてるその姿は全裸でなければさながらスーパーヒーローと言ったところだろうか。尤も本気を出した彼の前では、どれほど強いヒーローでも路傍の石程度の存在であるのだが。

「これで、フィニッシュ……ふん` っっっ……！！」

伸ばしていた腕を曲げていくココ。それによりバスが徐々に歪み、ひしゃげ、原形が破壊されていく。へし折れていくシャーシが無数の部品や金属片を撒き散らし、歪んでいくフレームが未だ残っていた窓を粉碎し、ガラスの豪雨を周囲に振り注がせる。内部に残されていた座席も根元から外れて、ゴトゴトと音を立てながらぶつかり合っている。

「ふぐぐっ……ぬん` っっ……！！」

ココが力むと上腕二頭筋、三頭筋が勢いよく膨れ上がり、親指ほどもある太さの血管が蛇行しながら幾筋も浮かび上がってくる。

ミギッ、ミヂヂイッ……ボゴンッ！！

顔よりも遥かに大きい力瘤の存在感は凄まじいが、彼の場合は驚異的な発達具合の大胸筋も評価されるべきだろう。腕の動きと連動して大きく盛り上がる大胸筋、いや雄っぱいは、厚さにすれば優に数十cm以上はあるだろうか。パンプアップして更に肥大化する雄っぱい

は、未だにその威容を増しているのではと思う程だ。

そしてココの肉体の変化はもう一つの場所でも起き始めていた。股間にぶら下がる超巨根、それがいよいよその全貌を見せつけようとしているのだ。

人の頭より大きい亀頭が送り込まれる血流でパンパンに張り詰め、鈴口は呼吸しているかのようにパクパクとしきりに開閉している。柔らかかった陰茎も膨れ上がる海綿体でミチミチと膨れ上がり、浮かび上がる大蛇のような血管がグロテスクさを一層増していく。大きさもあつという間に2mを超え、更に肥大化しているようだ。肉イボもその大きさを増して、巨大な肉イボが乱立するその見た目はまるで棍棒のようである。勃起は止まる様子を見せず、ココの身長と同じ3m近くにまで達する。余っていた肉襞も引き伸ばされてきてはいるが、まだまだ余裕があるように見える。

「んんゝ〜〜〜……っ！！チンチンもっとデカくなれえ〜〜っ！」

ミヂッ、ミヂヂッ……！！メリメリメリッ、メギメギイッ……！！ミギギイッ……！！

想像もつかない量の血液が注ぎ込まれ続けるココの逸物が、異音を上げながら一気に膨れ上がる。既にその長さは本人の身長を超え4m超、太さたるや直径2.5mはあるだろうか。まさしく人智を超えた異常さと言ったところだろう。

「ふうゝうっ……取り敢えずこんなもんだな。ま、これでもマジ勃起じゃねーんだけど」

ココが超巨根を勃起させてる間にも、金属が引き裂ける金切り音と、内部の機器の小さな爆発音が幾度となく響き渡っていた。それはまるで、このバスが断末魔を上げているかのようにも聞こえてくる。

やがてバスは真っ二つになり、辛うじて一部でフレームが繋がっているという惨状になってしまった。ココは、そのまま空き缶を捨てるかのような気楽さで地面にバスの残骸を投げ捨てる。こうして「ウォーミングアップ」が完了したことで、彼の身体つきは更なる変化を遂げていた。いや、寧ろ本来の姿に少し近付いたというところだろうか。全身の筋肉がパンプアップしたことでその巨体は一回りほど大きくなり、その身長は3.5m、体重は800kgにもなる。角や尻尾もあるので、さながら小さな怪獣のような迫力を漂わせている。

しかし一番の変化は股間に鎮座する超巨根だろう。竿だけで全長約5m、直径約3m。金玉は片方が直径2m、重量にして500kg。逸物全体で軽く2tはあると見て良いだろう。そんな規格外の代物をぶら下げてても、ココは気にする素振りすら見せず普通に動けるものだから流石である。

「せっかくだしこのバスも最後まで使っちゃうかな？このままにしとくのは勿体無いし」

そう言って徐に自らの超巨根を持ち上げるココ。そしてそれを勢いよくバスの残骸へと叩き付ける。凄まじい音と共に金属片が飛び散り、残骸が地面にめり込んだ。それを何度も繰り返す、バスだった残骸は鉄板へと姿を変えていく。叩き付けられる度に逸物がブリュッ！！とカウパーを噴出させて残骸を白濁に汚していく。カウパーと言ってもその量は数十倍にもなるので、あたり一面に精液臭を充満させるには十分すぎる程であった。やがて周囲の地面に無数の亀裂が入り、バスの残骸が1枚の鉄板に姿を変えた頃には、ココも一仕事したと言わんばかりに満足げな顔を浮かべていた。

普通なら出来ないことも、ゴリラライバーのような超人(人ではないが)になら出来る。車両ですら彼らにとっては自身の性欲を発散させるための道具にしかならないのだ。特にココくらいにもなると、その強靱過ぎる逸物を完全に勃起させるのは至難の業である。手で扱いてというのも出来なくはないが、それよりもこのように強い刺激を与えることにより、乱暴な形で勃起させる方が手っ取り早いという訳だ。

漸く満足いくレベルにまで勃起した超巨根を重々しく揺らしながら、ココは改めて物色を始める。いきなりバスを使っても良いが、それでは味気が無い。故にまず選んだのは軽乗用車だった。

「ちっちなー！これだと私のチンチンに耐えれそうにないですねー♥」

誰がどう見ても、という感じではあるがこれもまたココの楽しみの一つである。自分の逸物は如何なるものであっても征服できるという事実を確認することが、大きな興奮へとつながっているのだ。軽の背後に回り込み、巨大な亀頭を押し付けるとあっという間にガラスが割れて、バックドアを押し潰しながら侵入していく。座席を押し退けながら逸物を挿入していくが、既に陰茎の直径が軽の大きさを上回ってしまっている。軽自動車に逸物を突き立てたまま、先ほどと同じように地面に何度か叩き付けてあっという間に破壊してしまった。

「……金玉も気持ちよくしてえな」

巨大な金玉は引き摺るだけでもそれなりの刺激が感じられるが、それだけでは物足りないというのがゴリラライバーの性である。今度は普通車の側に寄ったかと思うと、身体を勢いよく捻り金玉を遠心力に任せて叩き付ける。爆発したかと思うほどの衝撃と轟音が炸裂し、車は10mほど吹き飛び無造作に地面を転がる。まるで猛スピードで走ってきた大型トラッ

クに追突されたかのような有様だ。さらにココは、吹っ飛ばした車を目掛けて勢いよく跳躍する。重心は自然と金玉の方に寄るため、グシャグシャに潰れた普通車にオーバーキルの追撃を繰り出す。

ズッドオオオオオオオオオンツツツ！！

爆風にも近い衝撃波が、停まっていた車や木々を木の葉のように吹き飛ばしていく。ココが金玉着地した地点を中心に直径 10m程のクレーターが生み出され、車は潰されて紙のようになってしまっている。そして一連の行動が超巨玉にも良い刺激になったのか、ゴボゴボと音を立てながら大量の精液を生み出しているらしく、大蛇のような血管も更にその太さを増している。

「ほんじゃ次はこのバス達で楽しみましょうかね♥」

再び並んでいるバス列にやってきたココ。一回り大きくなった彼の身長は大型バスの車高に比肩するほどで、巨大な車体と並ぶと尚その迫力が際立つというものだろうか。バスの正面に立って巨大な亀頭を押しつけるココ。その圧だけでガラスがひび割れ、バスがガタガタと揺れる。そのままフレームを鷲掴みにすると逸物をバスに突き立てていく。長さでは負けるが太さは車幅とそう変わらない事もあり、運転席や客席シートを引っ剥がし押し潰しながら、車体の中程まで逸物が侵攻する。

「う～ん、このゴリゴリ感が良いですねェ♥バスオナホ、病み付きなんだよなァ♥」

丈夫な金属製パーツも、ココにとってはシリコンオナホルの柔らかいヒダのようなものである。彼の超巨根も既に準備万端のようで、鈴口から大量に溢れ出すカウパーがシートもドロドロに濡らしていくことで丁度良い潤滑剤のような役割を果たす。バスのあちこちからカウパーがドロドロと溢れ出し、早くも地面に白濁の水溜まりを作り出していく。

「よっしゃ！ガシガシやってくでえー！」

ココがバスを持ち上げると腕の筋肉はポコポコと膨れ上がり、背筋もまるで鬼の貌のように僧帽筋が山のように隆起する。尤も、彼の場合は鬼ではなく竜の貌といったところだろうか。そしてそのまま腰を引き、一気に叩き付ける。それだけでバスの前面が箱のようにひしゃげ、部品が方々に散らばる。10t 近くあるバスもまるで本当にオナホのような扱いだ。

「オラオラオラオラァッ！！」

ピストンを加速させ凄まじい勢いで腰を叩き付け続けるココ。丈夫な筈のバスは、金属同士がぶつかり合うような轟音を上げながら見るも無惨な姿になっていく。筋肉隆々の巨体な人外が、自身の身体よりも大きい逸物でバスを犯すという余りにも荒唐無稽な光景。しかし、それは間違いなくこの世のものであった。

「おっ おっ♥精液のぼってきた……っ♥」

地面を粉碎しながら暴れ狂っていた超巨玉がギチギチと音を立てながら脈動し始める。どうやら大量の精液を解き放つ準備に入ったようだ。表面に走る皺がピシと引き伸ばされ、金玉は歪な形状ながらもある種芸術的な綺麗さを感じさせる見た目になる。固形のような粘度の精液が尿道を押し広げながら鈴口目掛けて殺到するので、大量の精液圧で只でさえ太いココの超巨根が更に肥大化する。バスのフレームは超巨根の形に歪み、そのあまりの質量と圧力であちこちが裂けていく。その金切り音はさながら、バスが断末魔を上げているかのようにも聞こえる。

「んんんっ………射精るっ♥ドラゴンザーメンぶっぱなすっ、ぐうううっ♥」

ドボッリュップブブブブブブブブブブブウウウウウッ！！！！ブリュップリュルルルルッ、ドォボボボボボボボボボボボボウウウウウッ！！！！ブリュリュップブブヂヂヂイイイッ！！！！

大質量の精液が一気に鈴口から放たれ、大気を精液が弾く事により凄まじい射精音が発生する。この音が大きければ大きいほど、射精の凄まじさも変わってくるという訳である。当然バスがそんな規模の射精に耐えきれぬはずもなく、一瞬膨れ上がったかと思うと風船のように破裂して四方に残骸を撒き散らす。大きな金属片などが周囲の車を破壊していくが、ココの筋肉は傷一つつくことなく弾き返している。

放たれ続ける秒間数万リットルという凄まじい量の精液は、バスの残骸を飲み込み周囲の車や林をも押し流していく。まさしく精液の大洪水といった様相だろうか。既に周囲数百mは精液に沈み、超質量の精液の体積で地形すら変化し始めている。川は精液で埋まり、岩肌が削り取られることで崖の崩落があちこちで引き起こされている。

「ふィ〜っ………取り敢えず1発目はこんなもんかぁ♥」

実に数千万リットルにも及ぶ量の射精を終えたところで、緩んだ顔でココはそう呟いた。精液は彼の膝程まで沈殿し、濃厚な精液臭と精液から放たれる熱気で周囲を充満させてい

る。常人であるこの一体に近寄るだけで卒倒するか、或いは壊れたかのように発情するかのどちらかという地獄のような光景だ。

一方でココの逸物はこれほどの射精をしたにも関わらず、依然としてその威容を保ったままである。超巨玉もパンパンに張り詰めているどころか、寧ろ先ほどよりも大きくなっているだろうか。これは、射精により代謝が活性化しているということである。しかし、ここで一つトラブルが起きてしまった。

「あ、しまったな……私の射精が凄過ぎて使おうと思ってた車がダメになってる」

そう、大量かつ凄まじい粘度の精液は車両を押し流すだけで無く、その密度と圧力で押し潰してしまっていたのだ。電車も放たれた精液塊が直撃してたらしく、大破して到底使い物にならなさそう。ココとしてはまだまだ楽しむつもりだったが、加減せず射精したのは失敗であった。尤も、物が無くても性欲を発散させることは出来る。しかし自分が気持ちよくなることに重点を置くゴリラライダーにとって、只のオナニーほどつまらない物も無い。

「どうすっかな〜……あっ、まだあるじゃん！」

ココの視線の先にあるのは、特に目立った被害が見られない廃ビルだ。車両よりも堅牢で、犯し甲斐は間違いなくあるだろう。とは言え幾ら巨体のココであってもそのサイズ比は如何ともしがたい……筈、なのだが。

[newpage]

「まア、デカくなり過ぎなかったら大丈夫やろ。……ふんッ！！」

ムクッ、ムググッ……ミギギッミヂッ、ミヂヂイッ……！！メリメリメリ……ッ！！……ボゴンッ！！ポココッ！

言うが早い、ココは力んで全身に力を込める。あちこちにポコポコと太い血管が浮き上がり、全身に膨大な量の血液を巡らせていく。只でさえ太い腕が、脚が更に太く。筋肉が膨張し、パーツ単位でドンドン肥大化していく。太く長い尻尾は更に長大になり、10m近いの長さに。各部位が大きくなることで、ココの身長は一気に15m程にまで巨大化した。僧帽筋や大胸筋が異常に肥大化して首が埋まりそうになっているなど、体型にも若干の変化が見られる。

そして身体に併せて、逸物にも変化が起きていた。元より巨大だった竿は波打ちながら肥

大化し、その重量で地面を抉りながら尚も反り返る猛々しさを見せ付ける。大蛇のような血管も、太いところでは成人男性の胴ほども太くなり反り立ったカリ高の亀頭には、大人が跨がっても余りあるほどの大きさを誇っている。そうして巨大化した竿は全長約 20m、直径約 10m にもなる。質量で言えば 100t 近くはあるだろうか。もはや生物の器官として存在してはいけなレベルの大きさになっている。しかし金玉もまた凄まじい変化を起こしていた。片方の直径が約 10m、もはや小さなガスタンク施設にも引けを取らない大きさだ。質量も片方だけで 100t 近くあるため、周囲の地面に無数の亀裂を走らせている。

「ふん、っと……取り敢えずこんな感じでイクか」

自らの肉体を満足げに見回すココ。腕を曲げて力瘤を作れば、顔よりも巨大な塊が極太の血管を浮かび上がらせながら山脈のような迫力を生み出す。太くなり過ぎた脚は逸物の存在もあって常時がに股になってしまうが、そんな些細なことはどうでも良い。ただ自分が気持ちよく射精できればそれで良いのだ。格納していた翼を広げ、大きく羽ばたく。凄まじい粘度の精液であっても巻き上げられるほどの暴風が巻き起こり、精液臭を多分に含んだ小さな竜巻が幾つも発生する。過積載気味に思える筋肉巨体と超巨大逸物も、本人の種族特性の前では大した問題にはならない。すぐに地面を離れ、宙へと巨塊が舞い上がる。

ブラブラと逸物を揺らしながらビルの真上へとやってきたココ。そして剛腕でもって逸物を押さえつけ、屋上へと狙いをつけたまま徐々に降下していく。横幅 5m 以上ある亀頭が屋上触れた途端、ミシミシとヒビが入り次の瞬間には崩壊して下階の瓦礫の雨を降らせる。そしてその下階も一瞬で巨大な亀頭にぶち抜かれ、呆気なく崩壊していく。ココは器用にホバリングしながら、そのままビルに超巨根を挿入していく。辛うじて竿の直径よりもビルの方が幅があるようだが、振動であちこちに亀裂が走っていく。

「ん〜♥この堅いゴツゴツした感じもまた車と違って良いんだよなァ〜♥」

竿を根元まで突き立てたココは、そのまま屋上にしがみつく。ビルの屋上に巨大な肌色の塊が乗っかっている光景は何とも奇妙なものだ。垂れ下がる超巨玉は尚も精液を大量生産しているらしく、ゴボゴボと音を立てながら徐々にその大きさを増している。300t 近いココの巨体は当然ビルに凄まじい負荷を掛けているようで、表面に多数のひび割れが出来始めている。

「よーし、これで何とか満足できそうだなァ。んじゃ、始めんでェ！」

そう言うときココは腰を引いて竿を中程まで引き抜き、一気に突き立てた。凄まじい地響きが周囲を揺らし轟音が響き渡る。破壊された各フロアに僅かに残っていたデスクや備品は

欠片も残さず搗り潰され、1階には逸物の形に大穴が開けられカウパーが貯まっている。

「はぁぁっ……♥建物でも犯せるドラゴンチンポ最高だぜ♥」

恍惚とした表情を浮かべるココ。何とも豪快な愉しみ方をしているがまだ始まったばかりだ。徐々にピストン運動を加速させ、建物オナホを愉しむ体勢に入っていく。

「オラオラオラァッ！！オリヤリヤリヤリヤリヤッ！！」

体勢的にはさながら種付けプレスといったところか。猛烈な勢いでココはピストンを開始する。凄まじい怪力、そして数百tの質量によるプレスで叩き付けられる腰と超巨玉による衝撃は想像を絶するものらしく、ビルはあっという間にボロボロになっていく。瓦礫が周囲に飛び散り、ビルを中心に地割れとクレーターが広がっていく。余りにも破壊的なココのプレスにビルが耐えきれぬ筈も無く、紙箱のように潰れてしまった。崩壊するビルと一緒にココも真逆さまに地面へと落ちていく。超巨根が大地を抉りながら深く突き刺さっていき、そして無防備に曝け出されている超巨玉が地面にモロに叩き付けられる。

「お`う`っ♥♥」

超質量の金玉が墜落した地面が叩き割られ、巨大な岩の塊が幾つも隆起する。その衝撃は凄まじく、ココを中心にちょっとした地震が起きるほどの揺れが周囲を襲う。そしてその衝撃は彼の分厚い筋肉に包まれた肉体には一切通用しないが、皮一枚に包まれた金玉には直撃する。尤もそれで潰れるほど柔ではないが、ゴリラライバーの身体で一番刺激を受けやすい部位が金玉である。そしてその刺激は全て、金玉が精液を作り出す原動力へと変換されるのだ。

ゴボボッ……ギョルギョルルッ、ドブッドブन्दブドブドプッ……

超巨玉が唸り声を上げながら更なる量の精液を作り始める。その様子は、さながら工場的大型機械が重々しく稼働しているかのような迫力を醸し出している。こうして精液を製造する快感はココ本人にも伝わり、彼の肉体を更に活性化させていく。血の巡りが加速し只でさえ筋肉巨体の肉体が更に一回りほど肥大化する。そして大地に突き立てられている超巨根も更に太く、大きくなり、岩盤を引き裂き、溢れ出るカウパーが湧き水のように亀裂から湧き出てくる。

「うお`おっ……♥！金玉ギョルギョルってるウ♥」

いた。筋肉が肥大化していた巨体も流石に元通りになっており、逸物も萎えてだらしく放り出されている。塊のような精液はその巨体を支えられるほどに堆積しているらしく、相当な範囲が彼の精液に沈んでしまったようだ。推定でも総射精量は兆を優に超えているだろう。そうして一息ついてるココに声を掛ける存在が一人、やって来た。

「あ、いたいた。おーい、ココちゃん」

白い毛並みの耳と尻尾を揺らし、ふよふよと飛行しながら近付いてきたのは白上フブキ。この町の住人であり、「管理者」の一人でもある。某狼の同居人やココなどと比較するとスレンダーではあるが、それでも常人を遙かに凌ぐ筋肉量と体躯、そして逸物の持ち主だ。

「フブキパイセン！こんばんはですよ」

「はい、こんばんは一。じゃ、なくて！また派手にやっちゃったねえ」

「す、スンマセン……我慢できなくて」

ゴリライバーが性欲発散と同時に引き起こす大災害は、同じライバーであればその超人的な能力により特段の問題にはならない。しかし破壊された町を元通りにするには、可能ではあるがそれなりに面倒なのだ。

「それでも本気の本気じゃないんでしょ？白上は恐ろしいよ」

「適当にどっか別の世界でオナニーしても良かったんですけど……面倒で！」

「面倒で済ませるなあ！」

「スンマセン！」

自分より小柄な相手に平謝りする筋肉巨体の大男というのは何ともシュールな絵面であるが、彼らの間には先輩後輩の観念があるようだ。尤も、それは無意識的なものであるらしく一体何の先輩後輩なのかは、知らないらしい。

「もう、どっかで埋め合わせして貰うからね～？今回は特別にテクスチャ張り替えて何とかしとくけど」

そう言うとなぶきは何やら術式のようなものを展開し、空間に表示されたそれら进行操作していく。すると精液の海がまるで画像加工されているかのようにどんどん消え、崩壊した町並みも以前のものへと戻っていく。ココの射精に巻き込まれて命を落とした人々も、それらは無かったことになるのだ。尤も、あくまでなぶきによる事象の上書きなので多少の変化は引き起こされるが。因みに影響を受けないゴリライバー達にとっては「また誰かやらかしたのか」という感覚である。

「私だってたまにはこれくらいガッツリ満足したいんだからねえ〜？」

なぶきは限られた地域における事象改変は可能だが、別の世界に気楽に行ける程達者では無い。可能ではあるが、労力的に見合わないというのが正確なところである。ココのように気さくに空間を叩き割って別世界にお邪魔することは出来ないのだ。

「ん〜……じゃあ、今度別世界で遊びましょう！やってみたい遊びがあるんですよ！」

「遊び？」

「ファンタジー世界で魔王ごっことか！巨大化して好き放題とか楽しそうじゃないですか？」

余りにも荒唐無稽な提案に一瞬ポカンとするなぶきだが、すぐに笑顔を浮かべる。

「良いねそれ……考えるだけで興奮しちゃうなあ♥」

「でしょ♥？」

そしてそんな荒唐無稽な遊びも、可能であるのなら彼らは嬉々として実行する。出来る遊びをやらないこと程、勿体ないことは無い。

そう、ゴリライバー達は自分たちが愉しむことについてはいつだって余念が無いのだ。